The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新型コロナウイルス感染症拡大下における高齢者の社会活動の実態 : 通所型サービス利用者を対象とした質的研究から
Author(s)	寺村, 晃; 濵田, 光佑; 岡山, 友哉 他
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 97-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新型コロナウイルス感染症拡大下における高齢者の社会活動の実態

通所型サービス利用者を対象とした質的研究から

寺村晃 大阪大学大学院人間科学研究科グローバル共生学講座、大阪保健医療大学保健医療学部
濵田光佑 大阪大学大学院人間科学研究科グローバル共生学講座
岡山友哉 大阪保健医療大学保健医療学部
石本恭子 川崎医療福祉大学医療技術学研究科

要旨

【緒言】
本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症拡大下における高齢者の社会活動の実態を明らかにすることである。
【対象と方法】
対象者は京都市の通所型サービスを利用する 75 歳以上の後期高齢者 12 名である。外出自粛の影響によって変化した社会活動について問い、その特徴を質的帰納的に分析した。
【結果】
困難な社会活動には「家族との関わり」、「知人との対面交流」、「ボランティア活動」の 3 つのカテゴリーがあった。しかし、その一方で、取り組めた社会活動には「家族のための活動」、「継続的な知人との交流」、「限定的なボランティア活動」の 3 つのカテゴリーがあり、工夫を凝らして取り組みを続けた、あるいは新しく始めた経験が伺えた。また、社会活動を実施できた要因としては「興味関心の有無」、「過去の経験の有無」、「人的環境の有無」、「物的環境の有無」の 4 つのカテゴリーが抽出された。
【結語】
パンデミックの際、高齢者の社会活動の維持および促進のために、高齢者自身の内的要因（興味関心、過去の経験）の把握と、高齢者を取り巻く外的要因（人的環境、物的環境）を調整する重要性が示唆された。

目次

1. 背景
2. 研究デザイン
2.1 調査地と対象
2.2 調査手法
3. 結果
3.1 対象者の基本属性とインタビュー結果
3.2 実施が困難だった社会活動
3.3 取り組むことができた社会活動
3.4 社会活動の実施に至る要因
4. 考察
4.1 感染症拡大下における社会活動の困難さ
4.2 社会活動を行うための内的要因と外的要因
4.3 研究の限界と今後の課題

キーワード

地域在住高齢者
新型コロナウイルス感染症
社会活動
通所型サービス
社会的フレイル

teramuraakira@gmail.com

1. 背景

高齢者の介護予防において、社会活動の視点を取り入れることの重要性が示唆されている（深川2021）。井上（2016）は、高齢者の社会活動を「高齢者が他者とのつながりをもち、社会に参加して行う行動のこと」と定義している。例えば、交通安全や環境美化などの地域に寄与する活動や趣味の会への参加などといった文化的活動だけでなく、子どもの世話や同居者以外との会食、茶話といった日常的な交流も高齢期の着目すべき活動として挙げられている。橋本（1997）は仕事、社会的活動、学習的活動、個人的活動の4側面から社会活動をとらえている。しかし、井上（2016）は仕事を含む社会活動には批判的で、仕事をしていない高齢者の活動が低下すると考察し、一般化することには課題があると指摘している。他にも、高齢者の社会活動をさらに広い意味でとらえた研究もある。例えば、社会活動と高齢期の健康に関する先行研究として、家族の相談相手になることが高齢者のQOLに有意に関連している報告がある（佐藤2011）。また、地域の運動ボランティアが高齢者の身体機能と認知機能に影響している報告もある（三ツ石2013）。このように、高齢期の身体状況や生活様式の多様性を踏まえると、高齢者の社会活動の実態は様々である。そこで、本研究では井上らの定義をもとに、高齢期に重要な社会活動として、他者とのつながりがみられる活動を広く社会活動として位置づけ、ボランティア等の特定の活動に絞ることなく、実際の高齢者の語りから広範囲の活動を範疇にいれることとする。

2020年4月7日、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、日本政府は緊急事態宣言を発令した。この宣言に伴って外出自粛が要請されたことにより、習い事やスポーツクラブ、サークル活動、通所型サービスの利用も中止となり、高齢者の他者との関りが減少したとの報告がある（都馬2021）。飯島（2021）は、高齢者294名を対象とした自記式質問票配布による調査において、41％以上の高齢者が外出頻度の低下を認めたと報告している。さらに同報告において、外出頻度の低下群は低下なし群と比較して、会話量の減少が約2.8倍も多かった。このように、外出自粛が招く活動量の低下によるフレイルの進行が懸念されている。

フレイルへの注目は、介護予防を考えるうえで重要である[1]。荒井（2014）は「フレイルとは、加齢に伴う様々な機能変化や予備能力低下によって健康障害に対する脆弱性が増加した状態」と述べている。つまり、フレイルとは要介護状態の前段階として位置づけられている。フレイルは、身体的フレイル（筋力低下など）、精神心理的フレイル（老人性うつなど）、社会的フレイル（閉じこもりなど）などのようにテーマ別に提示されることがある。社会的フレイルについては様々な側面から研究されており複数の定義がみられるが、Bessaらが行ったシステマティックレビューでは、社会的フレイルの要素のなかに社会活動をはじめ、社会的サポートや社会的ネットワーク、孤独感、独居を挙げている（Bessa et al 2018）。日本では、藤原（2017）の「社会活動への参加や社会的交流に対する脆弱性が増加している状態」という定義が、研究および実践の場にて用いられている。社会的フレイルの定義に関する一貫したコンセンサスはまだ提示されていないものの、Bessaと藤原の両研究において、社会活動は社会的フレイルの構成要素の一つとして位置づけられている。

社会的フレイルを含む様々な「フレイル」の概念は、それぞれが単独で生じるのではなく、相互に影響を及ぼすことによって負のサイクルに至るとされている。例えば、加齢に伴いボランティア活動等が行えなくなり、閉じこもりになった結果、筋力低下や屋外を歩行することが困難になり、抑うつ状態になることがある。一方で、関節痛による歩行障害といった身体的フレイルや物忘れといった精神心理的フレイルによって、社会活動が行えなくなるというケースもある。このように、社会的フレイルを中心に、身体的フレイルや精神心理的フレイルと相互に影響を及ぼし合うのである。

そのため、新型コロナ感染症拡大下における外出自粛による社会活動への影響を捉えることは重要な課題である。北海道の都市部に居住する高齢者119名を対象とした研究では、2019年と比較して2020年では社会活動を目的とした外出の減少が明らかになっている（大内2021）。しかしながら、外出自粛を余儀なくされた期間中における高齢者の社会活動の実態についてはまだ十分に報告されていない。特に、通所型サービスを利用し介護予防に努めていた後期高齢者に対する活動制限の実態や、家族や知人との交流、地域での活動といった具体的な社会活動の状況やその変化については調査されていな

い。こうした研究報告が不足している背景として、取り組み内容に個人差や多様性のある社会活動に関する定量的な調査が困難であることが一因として考えられる。

以上のことから本研究の目的は、通所型サービスを利用する地域在住高齢者の語りから、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって実施が困難になった活動と、なおも取り組むことができた活動を明らかにし、その活動の背景となる要因を質的に探索することである。

2. 研究デザイン

2.1　調査地と対象

調査地は、京都市西京区にある通所型サービスを提供する高齢者施設である。本施設は、介護予防・日常生活支援総合事業で行われる通所型サービスAの施設基準に沿って運営されている。主な活動内容としては、運動機能トレーニングではなく、利用者の得意とする手芸や囲碁、麻雀などの豊富な趣味活動を取り入れている（寺村2021）。本施設は、住宅地にある施設長の自宅の一角を活用した環境になっており、利用者は徒歩や自転車で通所できるため、近隣住民と交流が持てることも特徴である。

本研究の対象者は、介護予防を目的としてこの通所型サービスを利用する75歳以上の利用者12名である。筆者は当施設長と協議のうえ、利用者の生活背景や認知機能の低下に留意しながら対象者の選定を行った。選定基準は、日常生活動作（歩行、食事、整容など）に介護を要しない者、そして身体機能や認知機能に問題がない者、認知症の疑いがない者という基準を満たしていることを条件とした。なお、対象者には本研究の趣旨を文章と口頭で筆頭著者が説明して同意と署名を得ており、また本研究は大阪大学人間科学研究科倫理委員会の承認（登録番号OUKSC20010）を得て実施した。

2.2　調査手法

調査手法として、対象地でのフィールドワーク、基本属性の調査としての認知機能および身体機能の測定、そして社会活動に関する半構造化インタ

ビューを複合的に実施した。まず、筆者は2020年6月からフィールドワークを継続的に実施し、当施設の設立の経緯や特徴、定例活動、イベント、そして利用者同士の関係に着目して報告した（寺村2021）。本研究では、2020年11月からは新型コロナウイルス感染症の動向に注意しつつ、対象者らの施設内外における社会活動について参与観察および聞き取りを実施した。

次に基本属性の調査と半構造化インタビューについては、新型コロナウイルス感染症の蔓延から1年以上が経過した2021年3月～4月にかけて実施した。対象者の基本属性の調査として、性別、年齢、職歴、家族構成を聴取した。認知機能評価としてMini Mental State Examination：MMSE（Folstein et al. 1975）、歩行能力評価としてTimed Up and Go Test：TUG（Mathias et al. 1986）、高次生活機能評価としてJST版活動能力指標：JST-IC（Iwasa et al. 2018）について聴取および測定を行った。なお、MMSEとは広く用いられる全般的な認知機能障害のスクリーニング検査であり、11項目30点満点で評価した。TUGでは肘かけのない椅子に腰かけた姿勢から立ち上がり、3mを無理のない速さで歩き、折り返してから再び深く着座するまでの時間を測定した。JST-ICは地域で自立し活動的に日常生活を送るために必要な能力を測る指標として、「新機器利用」「情報収集」「生活マネジメント」「社会参加」という4つの下位領域を確認し、16項目16点満点で評価した。

さらに、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおける社会活動の状況について以下のインタビューガイドを使用し、対象者へのインタビューを実施した。インタビューガイドの概要は、(1)新型コロナウイルス感染症のパンデミック以前はどのような活動(家族、友人と関わる活動や地域の人と関わる活動など）をしていたか、(2) 新型コロナウイルス感染症のパンデミック以後はどのような活動（家族、友人と関わる活動や地域の人と関わる活動など）をしているか、の2点に注目したものである。対象者の自由な語りを尊重し、上記2点に関わる語りについて聞き取りを行った。社会活動のなかでも特に他者とのつながりがみられる活動について、その内容を詳しく聞いていく形でインタビューを進めた。インタビュー内容は、対象者の承諾を得てICレコーダーで録音した。

データ分析方法では、インタビューごとの逐語録を継続的比較法で質的帰

納的に分類し、データの分類とカテゴリーの抽出を次の工程で行った。(1) インタビューガイド項目ごとの逐語録を作成する。(2) インタビュー項目に沿って対象者の語り内容を意味のまとまった一文で区切る。(3) 表現の意味が変わらないように注意し、サブカテゴリー化する。(4) サブカテゴリーの意味や表現、対象者の認知状態の同じコードを一つのまとまりとして、生データの文脈に立ち戻りながらまとまりを比較して類型化を行い、カテゴリー化を行う。これらの工程について、作業療法を専門とする筆頭著者と、作業療法、理学療法、公衆衛生を専門とする共同研究者3名で円環的に理論的飽和に至るまで分類を実施した。「新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおける社会活動とその背景要因」について構造的に整理し、社会活動の実践課題について検討した。さらに結果の真実性を確保するために、質的研究の経験者から指導を受け、異なった理論的・方法論的背景に立つ複数の研究者が共同して検討に関わりトライアンギュレーションを行った。

3. 結果

3.1　対象者の基本属性とインタビュー結果

対象者の基本属性は表1に示す通りである。男性が2名、女性が10名であり、全体の平均年齢は79.9±3.1歳であった。家族構成は独居が7名、配偶者と同居が3名、子どもと同居が2名であった。MMSEは27.6±2.2点であり、認知症スクリーニングの1つの基準(杉下2016)とされている24点を対象者全員が満たしていた。地域在住高齢者の転倒リスクにおけるTUGのカットオフ値では、13.5秒と報告がある（Shumway-cook et al. 2000)。対象者のTUGは13.3±6.4秒であり、12名の内3名は転倒リスクが高かった。JST-ICは9.5±2.8点であり、高次生活機能が低下している者もいた。

インタビュー時間は一人当たり45分～77分であった。まず、逐語録から社会活動に関する語りを抽出し分析したところ、全体で6個のカテゴリーが生成された。そのうち、実施が困難であった社会活動は3個のカテゴリー（表2)、取り組むことができた社会活動は3個のカテゴリー（表3）であった。さらに、外出自粛時において社会活動を実施できた要因を分析したところ、4

表1. 対象者の属性

	性別	年齢	職歴	家族構成	MMSE（30点）	TUG（秒）	JST-IC（16点）
1	女	80	専業主婦	夫	30	8.2	11
2	男	83	商社	妻	24	25.5	9
3	女	81	病院職員	独居	30	10.1	13
4	女	83	新聞集金	独居	25	27.7	9
5	女	77	専業主婦	夫	27	10.8	13
6	女	83	専業主婦	次男息子	27	17.1	8
7	女	78	専業主婦	独居	30	7.9	6
8	女	77	事務職	息子夫婦、孫	28	10.9	3
9	男	81	銀行員	独居	25	11.1	12
10	女	75	証券、書字の先生	独居	25	13.1	10
11	女	76	栄養士	独居	30	8.7	12
12	女	85	事務員	独居	30	8.1	8
	SD	79.9 ± 3.1			27.6 ± 2.2	13.3 ± 6.4	9.5 ± 2.8

SD: Standard deviation, MMSE: Mini Mental State Examination, TUG: Timed Up and Go Test
JST: The Japan Science and Technology Agency Index of Competence

個のカテゴリー（表4)が生成された。次項以降に、その結果の詳細を示す。

3.2　実施が困難だった社会活動

カテゴリーは【　】、サブカテゴリーは『　』、研究参加者の代表的な語りは「　」の斜字体で示す。

新型コロナウイルス感染症のパンデミック前と比べて、社会活動の制限に着目してカテゴリー化を行った結果、3個のカテゴリーと9個のサブカテゴリーに整理された（表2)。

まず、カテゴリー【家族との関わり】では3つのサブカテゴリーに分かれ、日常生活内における家族・親族との関わりの減少だけでなく、季節の行事や冠婚葬祭という重要な家族イベントにも参加できないという、日常と特別行事双方の社会活動に影響が及んでいた様子がネガティブな感情とともに語られた。そのなかで、サブカテゴリー『孫のお祝い』では以下のような語りがあった。

「長い間、孫に会っていないね。お正月にも会えていないから、お年玉を

渡せてないわ。今度、学校を卒業する言うてたから、いつ会えるか分からんけど、またお祝いも考えてあげようかね。寂しい気持ちになるね。」

また、サブカテゴリー『親族の冠婚葬祭』では本人にとって大事な恒例行事に参加できなかった様子が伺えた。

「阪神大震災で亡くなった夫の慰霊祭が、毎年神戸で行われて、子どもたちと一緒に毎年行ってたんですよ。でも、コロナが流行ってから、県境をまたぐのがはばかれるから、今年は行けないのよ。普段、動いておらず、どんどん自分の体が弱っているのがよく分かる。来年、コロナが落ち着いたとしても、自分の体が弱ってしまって行けないと思うわ。」

次に、カテゴリー【知人との対面交流】では、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおける前後の近所付き合いや余暇活動の変化が語られており、他者との物理的距離や心理的距離が広がっていく様子が伺えた。例えば、サブカテゴリー『近隣とあいさつを交わす』では以下のような発言があった。

「コロナをどこでもらってくるか分からない。だから、近所の人にうつすのも、うつされるのも悪いからね。ご近所さんと極力話さないし、そもそも外を出かけることも少なくなった。体を動かさないから、力も入りにくいし、あちこち痛くなってきた。」

また、サブカテゴリー『知人とのイベントや旅行』では、楽しみにしていた友人との旅行等のイベントへの参加ができないというネガティブな語りがあった。

「着付け教室で知り合った若い友達と、毎年着付けをして、京都を歩くイベントをしていたのよ。それが楽しみでね。でも、今、着物を着て街を歩いていたら、不謹慎でしょ。結局、話にも上がらず中止になったわ。

表 2. 困難だった社会活動

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
家族との関わり	家族と過ごす	遠方に住む息子家族が、お盆も会えなかった／1年以上、離れている家族と会えていない
	孫のお祝い	正月やら誕生日にお小遣いをあげていたけど、今年は会えていない／毎年、誕生日で孫の成長を見るのを楽しみにしていたけど残念
	親族の冠婚葬祭	震災で死去した夫の慰霊祭に不参加になり、体が弱っていくので、来年も行けない
知人との対面交流	近隣とあいさつを交わす	コロナをうつすし、うつされると思うとご近所さんと話さないようになった
	知人とのイベントや旅行	着付け教室で知り合った若い人たちと、毎年着付けをして京都を歩くイベントが楽しみだったが不参加になった
感染拡大前のボランティア活動	趣味サークルの運営活動	趣味で行っている吟行の集まりで、県外の会員向けに京都市散策を企画していたが、中止に至った
	高齢者施設への慰問	高齢者施設で腹話術などを披露していたが、入館拒否になった
	自治会行事のボランティア	毎年、運営を手伝っていた自治会の夏祭りが中止になって残念に思う
	地域の生涯学習のボランティア	高齢者同士で顔を合わせるいい機会だったけど、感染リスクがあったため中止になった

前は、みんなに会いに、バスや電車に乗って、中心街まで行ったのにね。」

最後に、カテゴリー【感染拡大前のボランティア活動】では、表 2 に示したように 4 つのサブカテゴリーにおいて、様々な自主活動を実施できていない様子が伺えた。このカテゴリーでは、対象者が習慣として行っていた役割活動が制限されている様子が確認できた。つまり、他者への貢献が困難となり、生活の満足感が得られにくい状況が語りから浮き上がってきた。例えば、サブカテゴリー『趣味サークルの運営活動』では、以下の発言があった。

「趣味で俳句の会に入っているのよ。会員は近畿全域にいてて、色んな仕事をやってた人と出会えて、いい刺激になるのよ。会員が持ち回りで、地元の散策コースを紹介して、そこで俳句を考える吟行を楽しみにして

たんよ。県外の会員が京都に来て、京都散策を企画してたのに、中止になったから残念。気持ちが晴れない日が続いて、しんどいわ。」

また、サブカテゴリー『高齢者施設への慰問』では、以下のように述べられていた。

「近場の高齢者施設に行って、ちょっとでも喜んでもらおうと思って腹話術を見てもらった。やってると、こっちも元気になれるから続けたいと思っていた。でも、高齢者施設から感染予防のために入館拒否になってね。仕方ないわ。」

3.3　取り組むことができた社会活動

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響があっても取り組むことができた社会活動に着目してカテゴリー化を行った結果、3 個のカテゴリーと 10 個のサブカテゴリーに整理された（表 3）。

カテゴリー【家族のための活動】において、家族のために新しい取り組みを始める様子が伺えた。その方法は、直接的に対面で行う活動だけでなく、会えなくとも間接的に取り組める活動も含まれていた。その一例が、不慣れなアプリ操作を使用しての他者との交流や先送りにしていた私物整理、さらには生前整理である。このように、物理的距離があっても行える社会活動があることが明らかになった。一方で、新型コロナウイルス感染症のパンデミック前よりも配偶者の介護の負担が増大しているという課題も明らかになった。サブカテゴリー『配偶者の介護／介護予防』では、以下のように表現されていた。

「妻の認知症がコロナで悪くなってきていると思う。通院の時は時間がかかるけど、早めの外出準備や病院で感染予防に努めたり、負担はあるけど何とかやっている。」

また、サブカテゴリー『生前整理の実施』では、以下のように述べられ

表3. 取り組むことができた社会活動

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
家族のための活動	オンラインで連絡	覚えたての LINE や facebook で孫と写真のやり取りをしている
	コロナ関連情報を収集し家族と共有	テレビやインターネットで、感染状況や行政の動きをチェックしている
	配偶者の介護／介護予防	コロナで夫が弱らないように、屋外散歩をしている／認知症の妻の世話が増えて、通院の時に時間がかかるが、何とかやれている
	家族の私物整理	ボランティアが中止になり時間が空いたので、やろうと思っていた息子の服とかを整理した
	生前整理の実施	死ぬことを意識するようになったので、家族に伝えなければならないことをまとめた
継続的な知人との交流	知人とオンラインで体調を気遣う	仲良くしている知人と頻繁にメッセージのやり取りをし、お互いの体調を確認しあっている
	知人と作品のやり取りで交流	自分で作成した絵手紙に一筆添えて、離れている知人に送って近況報告をした
限定的なボランティア活動	通所型サービスでボランティア	家で何もやることがなかったけど、施設の人に呼んでもらって書字やマージャンのボランティアを始めた
	多世代交流で特技を披露	屋外イベントで地域の人に、手品を披露して喜んでもらった
	近隣の子どもに手作りマスクを配布	マスク不足を補うために、他の高齢者と一緒にマスク作成した

ていた。

「私、何もやる気にならなくなって、鬱っぽくなって死ぬと思ったのよ。このままやったらダメになると友達が思って、なかば強引やったけど公証人役場で遺言書を書く段取りしてくれてね。私が前に友達に話したのを覚えてくれてて。家族に伝えなければならないことをまとめることができて、ホッとしたわ。」

次に、カテゴリー【継続的な知人との交流】において、外出自粛や施設が閉鎖されるなかで、他者と連絡を取り合い、相互の体調を気遣いながら関係性を継続する活動があった。例えば、サブカテゴリー『知人とオンラインで体調を気遣う』では、以下のような語りがあった。

「通所型サービスで知り合って仲良くしてもらっている人たちと、感染に

気を付けるように、お互いの体調を確認している。いまは、携帯電話でメッセージのやり取りが簡単にできるから便利ね。」

また、サブカテゴリー『知人と作品のやり取りで交流』では、以下のような語りがあった。

「自分で作成した絵手紙に、近況報告の一筆添えて、離れているお友達に送ったよ。コロナで長いこと会えていないからね。心配しているのよ。」

当該施設では、絵手紙作成が月 2 回の定例イベントとして継続的に実施されている。筆者はフィールドワーク中に、この女性が実際に絵手紙を作成している様子を観察していた（図 1）。この語りをした利用者は足腰の不調を訴えるものの積極的に参加し、外出自粛のため疎遠になっている知人に絵手紙を送ることで他者を気遣うという意味づけをしている場面が観察できた。

さらに、カテゴリー【限定的なボランティア活動】において、新型コロナウイルス感染症の予防を行いつつ、少人数制のボランティア活動や屋外のボランティア活動に励んでいる利用者もいた。例えば、サブカテゴリー『通所型サービスでボランティア』では、以下の発言があった。

「コロナのせいで、家では何もやる気にならなかったわ。でも、通所型サービスの施設長が、他の利用者に書字を教えてあげてと言われてね。もともと、書字の先生をしていたから、また先生をやれることになって張り切ってるのよ。」

また、サブカテゴリー『多世代交流で特技を披露』では、以下のような語りがあった。

「昔からずっと練習していた手品を使って、コロナ前は病院や介護施設で慰問をして、他の高齢者に喜んでもらっていた。でも、コロナだから

図1. 絵手紙を作成する場面（筆者撮影）

図2. 通所型サービス主催で行われた多世代交流の屋外イベントで手品を披露する場面（筆者撮影）

全部中止になってね。通所型サービスの屋外イベントを企画してくれて、近所の人が見に来てくれてうれしかった。」

当該施設では、利用者が得意とする活動を積極的に他者に伝えるというボランティアを行っている。施設長と利用者が話し合って、手芸や書字の指導、また手品といった特技を披露し、近隣住民と交流できる場所として

も機能している（図 2）。

3.4　社会活動の実施に至る要因

新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおける社会活動の実施に至る要因に着目してカテゴリー化を行った結果、4 個のカテゴリーと 10 個のサブカテゴリーに整理された（表 4）。

表 4. 社会活動の実施に至る要因

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
興味関心の有無	他者に対する貢献意欲	長い間、会えていない家族に何かしてあげたい
	活動の優先順位付け	感染するよりも、家でじっとしている方が体が弱っていくという不安感
過去の経験の有無	職歴や特技を活かせる	お裁縫で生計を立てていたため手芸が得意になり、手芸を作ってコロナで会えていない知人にプレゼントした
	感染拡大前の習慣がある	野菜栽培を行って収穫できた野菜を近所の人におすそ分けをしている
人的環境の有無	声かけや誘ってくれる家族がいる	不要不急の外出が制限されたけど、離れていても家族がいつも心配してくれる
	一緒に参加する知人の存在	通所型サービスを通して知り合った人と、コロナ感染後に旅行を計画している
	相談しやすい介護スタッフの存在	コロナでうつの様になった . そのとき、介護スタッフに体調や近況を相談した
	行政や施設からの情報提供の存在	コロナ禍でも行われているイベントや取り組みを確認する
物理的環境の有無	親しみがあり、集える場所	非常事態宣言の時は、公共の施設やジムが閉まっていたけど再開して良かった
	短距離で徒歩圏内	歩いて行けるくらい近い場所に通所型サービスがあると、行きやすい

まず、カテゴリー【興味関心の有無】において、他者に貢献したいという利他的な意欲があり、疎遠になった家族や知人のサポートをしたいという意見があった。一方で、活動の重要度や緊急度を鑑みながら優先順位をつけている様子が伺えた。例えば、サブカテゴリー『他者に対する貢献意欲』では、以下の語りがあった。

「コロナが広がってから、長い間、会えていない家族に何かしてあげたい。

特に、孫は何かとやれてあげてないからね。子どもの時ぐらいは、いろいろやってあげたいわ。」

また、サブカテゴリー『活動の優先順位付け』では、以下のように述べられていた。

「感染するのが先か体が弱っていくのか先かと思うときがある。家でじっとしている方が体がなまる。外に出て、人と会って話す方が健康にいい。」

カテゴリー【過去の経験の有無】では、青年期や壮年期に培った経験、前期高齢者の時に行った経験、あるいは新型コロナウイルス感染症のパンデミック前に行っていた習慣や役割が、新型コロナウイルス感染症拡大下における社会活動に関係していた。サブカテゴリー『職歴や特技を活かせる』では、以下の発言があった。

「学生時代からお裁縫で仕事をやって、下の妹たちの面倒を見ていた。ずっとやっていると手芸も得意になってね。コロナで人に会えていないときは、手芸でポーチやらマスクを作って人にプレゼントしたよ。」

また、サブカテゴリー『感染拡大前の習慣がある』では、以下の語りがあった。

「退職する前から始めた畑で野菜を栽培している。コロナ前から収穫できた野菜をご近所の人におすそ分けをしている。コロナなんで、短時間だけお会いしてね。美味しくできると、皆さん喜んでくれてうれしいですよ。」

カテゴリー【人的環境の有無】では、対象者の周囲の人間関係が新型コロナウイルス感染症感染拡大下における社会活動に影響を与えていた。特に、配偶者や遠方の家族、近隣住民、通所型サービスに通う他の高齢者、

介護スタッフとの親密な関係性を基にする語りが多かった。サブカテゴリー『一緒に参加する知人の存在』では、以下の語りがあった。

「家にいるだけだったけど、通所型サービスに来る顔見知りになった利用者の方が親しくしてくれてね。あの人がいるから、一緒にする麻雀も楽しいのよ。コロナが落ち着いたら、神戸の方に旅行しましょうと計画しているのよ。」

また、サブカテゴリー『相談しやすい介護スタッフ』では、以下の語りがあった。

「ここの通所型サービスのスタッフの人はみんな親切。私がコロナで気分が沈んだ時も、利用日じゃないけど話を聞いてくれてね。コロナの時、一人暮らしで誰とも話できていなかったから、気持ちも落ち着いてね。作品作りに興味があったから、手芸の活動日の利用も勧めていただきました。」

最後に、カテゴリー【物理的環境の有無】では、新型コロナウイルス感染症拡大のために制限された公共施設や民間施設、また公共交通機関に対する現在の使用状況や、距離という物理的な壁がある遠方の施設に対する社会活動の制限がみられる語りがあった。サブカテゴリー『親しみがあり集える場所』では、以下の発言があった。

「公民館や自治体の活動は、いろいろ中止になって、皆が集まる感じじゃなかった。定期的に行っていたジムも閉まってね。ようやく少しずつ施設も再開して動き始めて良かった。」

また、サブカテゴリー『短距離で徒歩圏内』では、以下のように述べられていた。

「電車なんかも久しく乗っていないし、市街地にお出かけしてお友達と会うこともない。歩いて行ける通所型サービスは楽で良い。」

4. 考察

4.1　感染症拡大下における社会活動の困難さ

本研究の結果として、地域で暮らす後期高齢者の社会活動の状況とその変化が明らかになった。Pérez らのスペインで行われた研究では、ロックダウン中のフレイルに該当する高齢者 98 名を対象とした調査において、32％の高齢者が身体活動の不足を認めており、ロックダウン前の社会的ネットワークが身体活動の変化量に関連することを報告している（Pérez et al 2021）。Saraiva らのブラジルで行われた研究では、屋内退避命令中の高齢者 557 名を対象とした調査において、移動制限のあるフレイル高齢者は、非フレイル高齢者と比較して QOL の低下が約 2 倍であった（Saraiva et al 2021）。これらスペインのロックダウンやブラジルの屋内退避命令の事例から、高齢者の身体機能や QOL 低下の要因として、社会活動の低下が影響していたことが推察される。しかし、他国のような強制力のある国家レベルのロックダウンや屋内退避命令とは異なり、日本の外出自粛は任意であり、高齢者の社会活動の判断基準は各々に委ねられていた。本研究では、外出自粛の要請や公的民間施設の営業時間短縮という理由だけでなく、自身が感染する、もしくは他者に感染させてしまうリスクが理由として挙げられていた。結果として、自主的に他者との交流を制限し、社会活動を実施できていないケースや工夫してできたケースなど多様な活動状況が対象者の語りから伺えた。

日本において新型コロナウイルス感染拡大が深刻化した直後の 2020 年 4 月に行われた、北海道在住の高齢者 119 名を対象とした大内らの先行研究では、主観的な健康には変化がみられなかったと報告されている（大内 2021）。その要因として、新型コロナウイルス感染拡大から期間が短かったことが考察されている。一方、本研究では新型コロナウイルス感染拡大から 1 年以上が経過した長期間にわたる社会活動への影響に着目した。そ

の結果、対象者は感染予防に努め、孫の祝い事や親族の冠婚葬祭に参加できず、知人との交流や外出の頻度を減らしていた。さらに、従来行っていた社会活動が行えず、意欲低下や孤独感といった心理的不調を訴えるという主観的な健康に変化があった。

さらに、Yamada らが行った地域在住高齢者 1425 名を対象とした大規模な疫学研究では、低下した身体活動は、独居生活および社会活動が不活発な高齢者ほど改善しにくい傾向にあることが報告されている（Yamada et al 2021）。本研究では、対象者の半数以上は独居生活を営んでおり、対象者の中には自宅から出ずに誰とも会わない日があることも珍しくない。他者との交流や外出の頻度が減少していた調査時、筋力低下や関節痛などの身体的不調を訴える者もいた。今後もボランティア活動や趣味活動といった社会活動を自由に選択できない状況が続くことにより、身体的不調や心理的不調のさらなる増悪が懸念される。飯島（2018）は、社会とのつながりが低下して生活範囲が小さくなり、精神心理機能や口腔機能が低下し、身体機能が弱まって要介護状態につながる負の連鎖を「フレイルドミノ」と称して、新型コロナウイルス感染症の流行前から警告している。長期化する新型コロナウイルス感染症拡大下において、家庭内や地域内の社会活動の実施状況が及ぼす身体機能や精神心理機能の変化に着目して継続的に調査する必要がある。

一方で、新型コロナウイルス感染症のパンデミック前に行っていた社会活動が行えなくなったものの、新しい手段を模索し実践する対象者もいた。本調査では、家族や知人との交流に携帯電話のメッセージ機能を用いて、互いの体調を気遣うという形での社会活動も顕著にみられた。平時では少なかった高齢者の通信技術の利用が、互いの情緒的サポート関係を構築していたと推察する。長谷ら（2021）は、緊急事態宣言期間中において、日常に生じるストレスを調整できる能力が高い高齢者ほど、メールを介して他者とのつながりを維持していることを明らかにしている。これらの通信手段は身体的な負担が少ないために継続性が高く、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおける他者との交流では有益とされる。今後、高齢者による通信技術の利用の可能性については、加齢に伴う視聴覚機能や認

知機能、さらには手の細かな動き（巧緻動作）との関連性を調査する必要がある。

また、対象者のなかには配偶者の介護や介護予防に取り組む高齢者、さらに生前整理し自身の想いを家族に残す高齢者もおり、自身や家族の健康問題に不安を持ちながらも、自身の役割やすべきことを再認する機会になっていたと推察する。対象者からも、同居の有無に関わらず家族に対して直接的な関わりや携帯電話を使用した間接的な関わりを通して心遣いをする語りがあり、新型コロナウイルス感染症のパンデミックで家族の重要性を再認していた。

さらに、知人の誘いや介護スタッフの助言から、ボランティア活動を行う高齢者もいた。従前のような、密室で多数が集まるボランティア活動は行いにくくなっていたが、屋外のイベントや少人数で行うイベントのボランティア活動へ変更していた。また、柔軟に方法を修正し決定することで、図 2 のような屋外で行われる多世代交流の場で特技を披露することが可能になっていた。新型コロナウイルス感染症拡大下において、介護予防に取り組む高齢者施設では、社会参加の促進と感染予防対策の強化の両方が求められ、これまで以上に利用者の健康状態に配慮した関わりが重要である。

4.2　社会活動を行うための内的要因と外的要因

対象者は感染予防に努め、自宅での個人活動を中心とした結果、日常の中にあった他者との交流を含む社会活動の選択を狭めていた。そこで、表 4 を参照しつつ、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおける社会活動に至る要因を、高齢者自身の内的要因と高齢者を取り巻く外的要因の二つに分けて考察する。ここで言う内的要因とは興味関心と過去の経験であり、外的要因とは人的環境と物的環境である。

佐藤（2001）が行った 3000 名を対象とした社会活動の関連要因では、年齢、配偶者の有無、家族形態、健康度自己評価、体力自己評価で有意な差が認められた。本研究では、対象者の年齢や身体機能だけでなく、対象者自身の興味関心が社会活動を行ううえで重要であることが明らかになった。興味関心とは、同居している家族や遠方に住む家族、離れている知人

と交流を持ちたいという価値基準や社会活動を通して行う他者への貢献と言えよう。

また、高齢者自身が新型コロナウイルス感染症のパンデミック前よりも仕事や趣味に従事しているか、もしくは役割や習慣として日常的に行っていた経験が、新型コロナウイルス感染症のパンデミック後においても社会活動を遂行するための重要な内的要因になっていた。丸山（2021）は、積極的に社会活動を行ってきた高齢者ほど日常の活動性が高いゆえに、新型コロナウイルス感染症という有事における外出自粛や地域活動の休止の影響により、健康被害を大きく受けていると指摘している。感染症拡大前の高齢者の役割や習慣に着目し、高齢者自身の社会活動の遂行状況や満足度を高齢者施設のスタッフがより詳細に把握していくことが望まれる。

さらに、高齢者の周囲の人的資源にも着目すべきである。堀口（2018）が高齢者 498 名を対象に行った、社会活動を実施するための動機づけの研究において、子どもや配偶者のサポートや活動内の仲間関係に正の相関を示していたと報告されている。本研究においても、遠方に住む家族の存在や通所型サービスの他の利用者、介護スタッフの助言が、社会活動を始めるきっかけや継続する要因となっている語りもあった。社会活動を促進するために、配偶者や遠方に住む家族、近隣住民、通所型サービスに通う他の利用者、そして介護スタッフの存在が原動力になっているという点で、重層的な人的資源に着目することも忘れてはならない。

外的要因の一つである物的環境として、本研究対象者は日頃から電車やバス、タクシーといった公共交通機関を利用していた。不特定多数の人々と接触し感染リスクが高くなる公共交通機関の利用を控えたことにより、家族や友人との交流が少なくなっていたという語りがあった。農村部であれば、日常的な移動は自動車を用いるため活動範囲が広い。そのため、新型コロナウイルス感染症拡大下において、日常の活動範囲という点では農村部と比較すると都市部の方が狭くなり、移動手段が社会活動に影響を与えたと推察される。なお、本調査地の通所型サービスは徒歩で通えるという利便性があり安心して社会活動を続けられた、という語りもあった。当通所型サービスは利用者の自宅から近く、疎遠になりつつある近隣住民と

会う場所になっている。家族や近隣住民と交流することが減少していた最中、安心して他者と集える限られた場所の存在は、介護予防を継続するという視点から重要な役割を担っていたと考える。

新型コロナウイルス感染症拡大下に社会活動を促進するうえで、高齢者の興味関心と過去の経験といった内的要因の把握と、人的環境と物的環境といった外的要因に対する介入が、介護施設においてさらに期待される。

4.3　研究の限界と今後の課題

本研究では、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおいて、都市部の通所型サービスを利用する後期高齢者の社会活動の事例を分析した。本研究の限界として、まず特定の地域の限られた人数を対象とした質的研究であり、結果の一般化は限定されることが挙げられる。また、高齢者の社会活動に影響を与えた感染症や大規模災害といった社会状況の変化は他にも想定され、他の社会的隔離が必要な状況下との比較検討には至っていない。

今後は、地域の違いや他の社会状況の変化との比較を行いつつ、高齢者の多様な社会活動に関して調査を広げ、様々な角度から介護予防の可能性を示していく研究が望まれる。

謝辞

研究フィールドであった通所型サービスを提供する高齢者施設の施設長、介護スタッフ、そして利用者の皆様に多大な協力を得て実施しました。いつも暖かく迎え入れていただき、活動に参加できたことを感謝しております。この場を借りてお礼申し上げます。

注

1　以前、フレイル（Frailty）は「虚弱」と訳されていたが、2014年に日本老年医学会が「フレイル」と訳した。その理由として、「虚弱」というネガティブな表現を払拭すること、フレイルの多面的な側面に着目すること、可逆性を考慮することが挙げられる。フレイルは「健康」と「要介護」の中間として位置づけられ、介護予防の鍵を握るステージとされている。

参照文献

荒井秀典
2014 「フレイルの意義」『日老医誌』51: 497-501。

飯島勝矢
2018 「高齢者と社会 (オーラルフレイルを含む)」『日本内科学会雑誌』107(12): 2469-2477。
2021 「フレイル健診　COVID-19流行の影響と対策：「コロナフレイル」への警鐘」『日本老年医学会雑誌』58(2): 228-234。
2021 「With コロナ時代のフレイル対策―日本老年医学会からの提言―」『Aging & Health』97: 6-9。

井上彩乃・田髙悦子・白谷佳恵・有本梓・伊藤絵梨子・大河内彩子
2016 「地域在住高齢者における社会活動尺度の開発と信頼性・妥当性の検討」『日本地域看護学会誌』19(2): 4-11。

大内潤子・林裕子・松原三智子・宮田久美子・山本道代・市戸優人・真田博文
2021 「新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策が地域在住高齢者の活動および主観的な健康に与えた影響：北海道の感染第 1 波における検討」『日本看護研究学会雑誌』44(4) 599-609。

加藤佳津子
2004 「高齢者の自立と生きがい支援活動に関する研究」『佛教大学大学院紀要』32: 161-174。

佐藤秀紀・佐藤秀一・山下弘二・山中朋子・柴田ミチ・鈴木幸雄・松川敏道
2001 「地域在宅高齢者の社会活動に関連する要因」『厚生の指標』48(11): 12-21。

佐藤美由紀・齊藤恭平・芳賀博
2011 「地域高齢者の家庭内役割とQOLの関連」『日本保健福祉学会誌』17(2): 11-19。

杉下守弘・逸見功・竹内具子
2016 「精神状態短時間検査-日本版 (MMSE-J) の妥当性と信頼性に関する再検討」『認知神経科学』18(3/4): 168-183。

寺村晃
2021 「介護予防・日常生活支援総合事業における利用者の活動と社会資源地域のなかの通所型サービスを事例として」『未来共創』8: 209-232。

都馬友江
2021 「認知症予防の新しい様式：コロナ禍という視点から」『名古屋経営短期大学紀要』62: 95-107。

橋本修二・青木利恵・玉腰暁子・柴崎智美・永井正規・川上憲人・五十里明・尾島俊之・大野良之
1997 「高齢者における社会活動状況の指標の開発」『日本公衆衛生雑誌』44(10): 760-768。

長谷麻由・原口健三
2021 「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）禍における地域在住高齢者のエゴ・レジリエンスと健康維持活動およびフレイル傾向との関連」『理学療法科学』6(4): 515-520。

深川周平・森本友香・平野美千代
2021 「委託機関が実施する介護予防教室のプログラム内容の特徴―教室参加者の社会活動の満足度に着目して―」『日本公衆衛生看護学会誌』10(2): 72-79。

藤原佳典
2017 「地域高齢者における社会的フレイルの概念と特徴～社会的側面から見たフレイル～」『日本転倒予防学会誌』3(3): 11-16。

堀口康太・大川一郎
2018 「高齢者の社会的活動への動機づけと他者との関係性の関連－活動内の仲間関係，配偶者，子供，孫の4側面に着目した検討－」『教育心理学研究』66(3): 185-198。

丸山あかね・熊谷玲子・井上映子
2021 「新型コロナウイルス感染禍での地域高齢者の社会的ネットワークにおける交流 : 高齢者サロン参加者を対象に」『城西国際大学紀要』29(8): 35-53。

三ツ石泰大・角田憲治・甲斐裕子・北濃成樹・辻大士・尹之恩・尹智暎・金泰浩・大藏倫博
2013 「地域在住女性高齢者の運動指導ボランティアとしての活動が身体機能と認知機能に与える影響」『体力化学』62(1): 79-86。

Bessa B, Ribeiro O, Coelho T
2018 Assessing the social dimension of frailty in old age: A systematic review. *Arch Gerontol Geriatr*. 78(9.10) 101-113.

Hajime Iwasa・Yukie Masui・Hiroki Inagaki・Yuko Yoshida・Hiroyuki Shimada・Rika Otsuka・Kazunori Kikuchi・Kumiko Nonaka・Hiroto Yoshida・Hideyo Yoshida・Takao Suzuki
2017 Assessing competence at a higher level among older adults: development of the Japan Science and Technology Agency Index of Competence (JST-IC) . *Aging Clin Exp Res* 30(4)，383-393.

Mathias S・Nayak US・Isaacs B.
1986 Balance in elderly patients: the "get-up and go" test. *Arch Phys Med Rehabil*.67(6):387-389.

Folstein MF・Folstein SE・McHugh PR
1975 “Mini-mental state”: a practical method for grading the cognitive state of patients for

the clinician. *Journal of Psychiatric Research*12, 189-198.

Pérez LM, Castellano-Tejedor C, Cesari M, Soto-Bagaria L, Ars J, Zambom-Ferraresi F, Baró S, Díaz-Gallego F, Vilaró J, Enfedaque MB, Espí-Valbé P, Inzitari M
2021 Depressive Symptoms, Fatigue and Social Relationships Influenced Physical Activity in Frail Older Community-Dwellers during the Spanish Lockdown due to the COVID-19 Pandemic. *Int J Environ Res Public Health* 18(2):808.

Saraiva MD, Apolinario D, Avelino-Silva TJ, de Assis Moura Tavares C, Gattás-Vernaglia IF, Marques Fernandes C, Rabelo LM, Tavares Fernandes Yamaguti S, Karnakis T, Kalil-Filho R, Jacob-Filho W, Romero Aliberti MJ.
2021 The Impact of Frailty on the Relationship between Life-Space Mobility and Quality of Life in Older Adults during the COVID-19 Pandemic. *J Nutr Health Aging*. 25(4):440-447.

Shumway-Cook A・Sandy Brauer・Marjorie Woollacott
2000 Predicting the Probability for Falls in Community-Dwelling Older Adults Using the Timed Up & Go Test. *Physical Therapy*. 80(9): 896–903.

Yamada M, Kimura Y, Ishiyama D, Otobe Y, Suzuki M, Koyama S, Kikuchi T, Kusumi H, Arai H.
2020 Recovery of Physical Activity among Older Japanese Adults Since the First Wave of the COVID-19 Pandemic. *J Nutr Health Aging*. 24(9):1036-1037.

Social Activities of Community-Dwelling Older Adult in COVID-19: Interviews with Users of Day-care Service in Kyoto City

Akira TERAMURA, Kosuke HAMADA,
Tomoya OKAYAMA, Yasuko ISHIMOTO

Abstract

Introduction: Social activity is considered to be an important factor in the prevention of care for the elderly. The purpose of this study is to clarify the actual situation of social activities in COVID-19 through qualitative research focusing on the narratives of the elderly.

Subjects and Methods: The subjects were 12 elderly people over 75 years old who use a day-care Center in Kyoto City. The subjects were selected from those whose cognitive and physical functions were maintained and who were using day-care services for the purpose of care prevention. Semi-structured interviews were used to qualitatively and inductively analyze the characteristics of social activities in terms of activities that became difficult to carry out and activities that were able to be undertaken due to the effects of the COVID-19 voluntary restraint from going out.

Result: From the narratives on social activities in COVID-19, there were three categories of experiences that were difficult: family relations, face-to-face interactions with acquaintances, and volunteer activities. On the other hand, there were three categories of experiences that were implemented: activities for family members, ongoing interaction with acquaintances, and limited volunteer activities, indicating that they continued their efforts with ingenuity or started new ones. There were four categories of factors that enabled the implementation of social activities were identified: interest, past experience, human environment, and physical environment.

Conclusion: Due to the prolonged period of voluntary restraint from going out, various changes were observed in the social activities of the elderly. In order to maintain and promote social activities, it is important to focus on understanding the internal factors of the elderly, such as their interests and past experiences, and intervening in the external factors, such as the human and physical environments surrounding them.

Keywords : Community-Dwelling Older Adult, COVID-19, Social Activities, Day-care Center, Social Frailty